

2021(令和3)年度

# 俳句講座 句集

— 第2集 —

講師 倉科繁登先生

(長野県俳人協会会長)

塩尻市中央公民館

# 目次

炎	………	清水 勝子	1
青い空	………	五条 さと	3
葉牡丹	………	杉原 宮子	5
芝桜	………	掛橋 庸子	7
白牡丹	………	田中 覚重	9
軒氷柱	………	山崎 政子	11
ふきみそ	………	中島 ゆき	13
風の軌道	………	長 泰裕	15
一片の時間	………	赤津 勝広	17
春隣	………	成瀬	19
風花	………	長 美枝子	21
石路の花	………	和美	23
サインポール	………	塩原 しほ	25
はこべ	………	かやの	27
喜寿の夏・秋・冬	………	飯田 正孝	28
新樹	………	樋口 芦笛	30

炎

その一

清水勝子

春宵のゼリーのやふな時間かな

常念岳にあふるる光り種を撒く

地の鼓動空へ飛ばせり山椿

梅雨滂沱天地すれ合ふ音すなり

ゆきずりの君にさしだす夏薊

炎

その二

清水勝子

一杓の水に浮きたる京紅葉

翁の忌齡重ねて見ゆるもの

霜柱踏めば怒濤を踏む如し

雪解川村中の息天に帰す

天と地の間合ひに炎滝氷柱

# 青い空

その一

五条さと

轉りのシヤワーを浴びし目覚めかな

友くれし藍染の種庭に蒔く

向日葵や影なき昼の大工たち

我ひとり線香とぼすお盆かな

栗むきて老いゆく父の真似をせり

# 青い空

その二

五条さと

朝寒や一羽の鳥と出会ひたる

戦争のなき日は遠し十三夜

霧の朝天使この地に舞ひ降りぬ

薪割りて木の民となり十二月

方言の行き交ふ風呂や初笑

# 景牡丹

その一

杉原宮子

雨の神もうたくさんです盆の入り

盆荒で水とコロナで過ぎし日々

盆花と提灯ゆれて夫来たね

あわれなり華やかなれど散るぼたん

散歩道小川の草も氷柱の連

# 葉牡丹

その二

杉原宮子

軒下の氷柱光る虹の色

葉牡丹や十二単の娘に見え

三九郎上る煙に願ひ込め

コロナ行け三九郎と共に宇宙の果て

サグラダのマリアの塔や三九郎



# 芝桜

その一

掛橋庸子

黒板に別れの言葉ヒヤシンス

ままごとの手にあふれたる落椿

ざわざわと物の怪の音柏散る

弓なりの道に沿ひたる芝桜

花の種土に入りて雨を知る

# 芝桜

その二

掛橋庸子

明日咲くと言ひし牡丹や雨の夕

ポロロんと和傘で遊ぶ五月雨

一本の糸が奏でる女滝なり

亡き父の機嫌良き夢白牡丹

極彩の涙を流す氷柱かな

# 白牡丹

その一

田中覚重

一株の一庭占むる白牡丹

穂の揺れで風力を知る麦の秋

沙羅の花落ちてなほ咲く命かな

コンマ以下競ふ炎暑のオリンピック

つきつきとでかき芋握る休みの子

# 白牡丹

その二

田中覚重

芭蕉忌や庭木の景色個性あり

床屋出て耳元かする秋の風

鍬振るは筋肉運動天高し

三九郎ぽつんと立ちてその日待つ

日を浴びて水滴となる軒氷柱

# 軒氷柱

その一

山崎政子

鎌で切り持って行きなと黄水仙

梅雨空をどんと突き刺し札幌便

落つる滝また滝となり生まれ来よ

盆菓子の鮮やか過ぎる寂しさよ

秋雲の上にあるらし喫茶店

# 軒氷柱

その二

山崎政子

地球からメリツメリツと抜く大根

だいにこ

蕪煮るほのかなかぶら苦み知りたくて

去る牛と忍び寄る寅師走かな

心配は棚にしまひて雪見酒

軒氷柱飛べ天空をどこまでも

# ふきみそ

その一

中島ゆき

落みその未だ及ばぬ母の味

去る人はヒヤシンスの香置いてゆき

幅利かす見知らぬ草やこぼれ種

ガザの子等夢の破れし炎暑かな

小さき日の盆花摘みし野の今は

# ふきみそ

その二

中島ゆき

思ふこと有りし上枝の柘榴かな

霜枯や春草の絵の中にいて

雪しまく乗り手無くせしオートバイ

旧姓で呼ばれ振り向く冬の街

雨となりあへなく消ゆる氷柱の子



# 風の軌道

その一

長 泰裕

春の雲流るる時の化身かな

猫見上ぐ鳥雲に入る天のはて

戸隠山の陰くろぐろと夏来たる

滝の音混じる無言の祈りかな

大花野おのれの地図を探しをり

# 風の軌道

その二

長 泰裕

吾亦紅ひそかに風を起こしけり

降る落葉風の軌道に遊びをり

縄文の朝のひかりや霜の花

アルバムを棄てて冬日の軽さかな

野梅咲く無人の街の十一年

# 一片の時間

その一

赤津勝広

節分草地の胎動を伝へをり

荷をほどく街三月の朝戸風

沈黙のフード脱ぎたり卒業子

一片の時間離れゆく夕牡丹

あめんばう濁世の波間彷徨ひぬ

# 一片の時間

その二

赤津勝広

沙羅の花一夜の夢も見れぬまま

盆過ぎて座敷の風の止みにけり

秒針の刻むがごとく翳雲

翌年を見つむる老母や蔓たぐり

しゅんしゅんと震ふ鉄瓶年守る

# 春隣

その一

成瀬

麻酔覚め手術に耐えし春隣

登園児の指差す先に氷柱かな

オミクロン株根絶願ふ三九郎

刻々と発車のベル待つ石路の花

甘酒の手みやげ下げ下げて友の来る

# 春隣

その二

成瀬

尻取りとまちがえさがし梅雨ごもり

寂聴の法話の笑顔山眠る

山城ののろし上がるや大枯野

八十のワクチン待ちの日永かな

シヤリシヤリと夜の静寂や霜の花

# 風花

その一

檸檬

春の海今日も土砂が入れらるる

あかあかと春塵の丘土踏まず

物言えば嚴罰のミヤンマー花菱

すきとほる海へ「処理水」山背風

草原の風濃くなりぬ夏料理

# 風花

その二

檸檬

風鈴や名もなき家事の昼下がり

山法師ひと夜未来を照らしをり

サムライの奏でるシヨパン紅葉燃ゆ

風花やゴルゴは死なず五十年

老人の握手やはらか春来る



# 石路の花

その一

和美

児の背負ふ重き未来や武具飾る

潮騒や切子に満たす冷し酒

河童忌や朝晩まはる野菜畑

老いてなほ拘りありぬ吾木香

断捨離の抄らぬ日や翳雲

# 石路の花

その二

和美

ありの実の皿に滴る夜の卓

奇跡など起こらぬ余生石路の花

身の丈に合はせセーター縮みけり

鬼の面被ったやうな受験生

芭蕉忌や置き忘れたる旅ごころ

# サインポール

その一

塩原しほ

コロナ禍を白寿の義母と耐へて春

姪ひとり異国に在りて春の星

東で来る山風飲みて鯉幟

郭公の引っぱって来る電車かな

蝉しぐれ陸軍伍長と墓碑銘に

# サインポール

その二

塩原しほ

おもむろに浮き来し秋の金魚かな

虫鳴けり余熱かすかな竈の陰

柿たわわ遺跡の村は夕まぐれ

落葉降るサインポールの休み無く

雪催ボコリボコリと薪の風呂

はこべ

その一

かやの

子ら眠る白き夜明けに初音売り

盆をどり下駄をひびかせよる笑顔

亡き母の命の雫ナイヤガラ

喜寿の夏・秋・冬

その一

飯田正孝

花の王栄華十日で退位する

梅雨の月隠れる前に深呼吸

白装束滝に打たれて時止める

燃え上がる送り火見つめ押し黙る

フジバカマゆらりゆらゆら花唄う

喜寿の夏・秋・冬

その二

飯田正孝

災いか恵みの雨か秋深む

白内障眼帯とれて菊まぶし

棟上げの槌音軽く霜日和

大だるま宙ぶらりんの三九郎

ドレミファに並んで光る軒氷柱

# 新樹

その一

樋口芦笛

参道の太き木の根や初明り

白息を包みて手話を交しをり

補聴器の拾ふ風音深雪晴

鳴く牛の鼻の上向く寒の明け

山畑の初音に地靄けぶりけり



# 新樹

その二

樋口芦笛

奥木曾の新樹に抱かれ牛を飼ふ

道折れて帰る燕と同じ向き

鷹渡る遺跡に丸き柱穴

遠浅間山噴けり秋天深くあり

鉄を接ぐ光りしきりや冬早

おわりに

塩尻市中央公民館俳句講座の句集第2号ができあがりました。一年間の講座のまとめとして、発行いたします。

令和3年度(2021年度)は、コロナウィルスの感染拡大、夏の豪雨災害、ロシアのウクライナ侵攻といった心を痛める出来事が多くあった年でした。受講生の俳句にもその苦しみや悲しみが多く詠まれています。半面、日常のちよつとした出来事や四季の変化などその喜びや美しき、心を揺さぶられた一瞬を俳句として表現してきました。そんな受講生の一年間の歩みが、この句集にまとめられています。

この句集が、これからの句作の道しるべとなることを願っています。

講師の長野県俳人協会会長 倉科繁登先生には一句一句について丁寧にご指導いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和 四年 三月

塩尻市中央公民館長

赤津勝広

俳句講座句集 (2021年度)

第2号

2022年3月31日 発行